友人と学業に関する出来事の感情価に関する研究

○兵藤宗吉¹・野内類²

(¹中央大学文学部・²東北大学加齢医学研究所)

Key words:感情制御・自伝的記憶・感情価

An experimental study of the emotional valence of autobiographical memory retrieval investigated by using a cue word "friend" and "schoolwork".

Muneyoshi HYODO¹, Rui NOUCHI²

(¹Chuo University, ²Tohoku University)

Key words: emotional control, autobiographical memory, emotional valence

問題

自伝的記憶と感情との関係について、兵藤(2003)・兵藤・野内(2004, 2005, 2006)は、忘却の視点から5分という短い想起時間を設定し大学生を対象に、小学校、中学時代、高校時代、大学時代の出来事について想起させた結果、エピソードの多いことを報告している。

本研究では、「友人」と「学業」を手がかり語とし感情価の関係を検討した。さらに出来事の記述前後の気分変化を調べることでより自伝的記憶の感情制御の効果を検討した。

方法

参加者 大学生 23 名(男性 9 名、女性 14 名)が実験に参加した。平均年齢は 21.52 歳(SD=1.31)であった。

デザイン 2(出来事の内容:友人、学業)×3(出来事の感情価:快、不快、中立)の 2 要因被験者内計画であった。

実験冊子 フェースシートと気分評定用紙 2 枚(出来事の想起前後)と出来事を記入する用紙をテーマ(友人、学業)ごとに 1 枚ずつと自伝的記憶の評定方法が書かれている用紙 1 枚の計 6 枚(A4)を順番にまとめて実験冊子とした。実験冊子は出来事のテーマを入れ替えた 2 パターン作成した。

気分評定尺度 寺崎ら(1992)の多面的感情状態尺度を元に気分評定尺度を作成した。ポジティブ尺度 9 項目とネガティブ尺度 9 項目の計 18 項目からなり、全ての項目は、5 件法で答えさせた。

手続き 大学の講義の時間を利用して集団法で実験を行った。参加者に実験冊子を配り、実験者の指示によって実験を行うことを伝え、フェースシートに記入させた。その後、自伝的記憶想起前の気分状態を測定した。全員が回答したのを確認した後に、5 分間ずつ友人・学業に関する出来事のいずれかを出来るだけ多く想起させ、想起した順番に実験冊子に記入させた。このとき、出来事の順番は参加者間でカウンターバランスを取った。そして、その出来事に対して「今どのように感じているか」について「1. とても不快」～「5. とても快」の 5 段階で評定させた。最後に、自伝的記憶想起語の気分状態を測定した。実験にかかった時間は約 20 分ほどであった。

結果・考察

将来の出来事の感情価 出来事の総記述数は 365 個(友人の出来事の記述数 194 個、学業の出来事の記述数 171 個)。出来事に対する現在の感情価評定のとても快・少し快を「快評定」とし、少し不快・とても不快を「不快評定」とし、中立を「中立評定」とした。想起された出来事の平均再生率をまとめたのが表 1 である。

時期と感情価ごとの割合に対して、2(テーマ:友人、学業)×3(感情

価:快、不快、中立)の 2 要因被験者内の分散分析を行った。分析の結果、感情価の主効果($F(2, 44)=12.26, p<.01$)とテーマと感情価の交互作用が有意であった($F(2, 44)=20.36, p<.01$)。交互作用が有意であったので、単純主効果検定を行ったところ、快の出来事におけるテーマの効果($F(1, 66)=40.02, p<.01$)、不快の出来事におけるテーマの効果($F(1, 66)=5.92, p<.05$)、中立の出来事におけるテーマの効果が有意であった($F(1, 66)=15.14, p<.01$)。また、友人における感情価の効果が有意であったので($F(2, 88)=30.20, p<.01$)、Ryan 法による多重比較を行ったところ、快の出来事は不快と中立の出来事よりも多かった。

感情制御の効果 多面的感情状態尺度(寺崎・古賀・岸本, 1992)のより作成した気分評定尺度の下位因子の合計得点を出した(得点範囲は 3 点から 15 点;表 2)。出来事の記述前後の合計得点ごとに対応のある t 検定で比較した。その結果、出来事の記述後に活動的快と親和の得点が下がった($t(22)=1.90, p<.10$; $t(22)=1.77, p<.10$)。

考察 これまでは、時代別で出来事を想起させ分析した。今回のテーマ別では異なる結果で興味深い。特に、友人における快の割合の高さ、学業における不快の高さが注目される。ただし、全体での割合は、ほぼ、5:2.5:2.5 であり、やはり快の割合が最も高い事が確認できる。

感情制御では学業における不快の割合の高さの為か、活動的快、親和の得点低下が認められ、これまでの結果とは異なる。以前のデータでは、不快の得点の低下が観察されたので興味深い。

表1 出来事の内容と感情価ごとの割合

友人	快	不快	中立
平均	.68	.17	.15
標準偏差	(.23)	(.21)	(.17)
学業	快	不快	中立
平均	.34	.30	.36
標準偏差	(.17)	(.24)	(.26)

表2 出来事の記述前後の気分状態の変化

	抑うつ・不安		敵意		倦怠	
	前	後	前	後	前	後
平均	8.7	8.17	4.48	4.65	9.04	8.7
標準偏差	(3.36)	(4.00)	(2.43)	(2.71)	(3.04)	(2.96)
	活動的快		非活動的快		親和	
	前	後	前	後	前	後
平均	6.91	6.26	10.36	9.39	6.26	5.74
標準偏差	(2.54)	(2.61)	(3.26)	(3.65)	(3.17)	(3.05)